

# かささぎ 通信 第46号

2016年6月10日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年五月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年8月号初出の三作品を読みました。  
「ゴム人形」(森三郎)、「繪」(小松淑郎)  
「まほう塚」(村尾茂)

『赤い鳥』昭和9年(一九三四年)8月号には、五月の「作品を読む会」で読んだ「ゴム人形」「繪」「まほう塚」と、6月に読む「めぐりあひ」の四つの森三郎作品が、名義を変えて載っています。

「繪」は、引越しをした家の壁に、前の住人が貼ったままにしてあった一枚の絵をめぐる話です。それは外国の雑誌からでも切り取ったらしい、三色版の大きな絵で、見ているうちに重苦しい気持ちになるような暗い色彩の絵なので、破ろうとすると、お父さんが、「これは何とかいうロシアの絵描きの描いた有名な絵」だからと、押し止めます。絵の右半分は、高い塀が続いていて、長い黒マントを来た西洋人のおじいさんが、塀の門の中にすうつと入ろうとしている構図です。

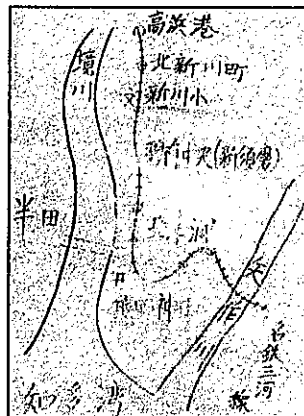
会員の水野さんは、この描写から、画家がロシアで生まれたマルク・シャガール(1887~1985)で、この老人は、シャガールが生まれ故郷ヴィテブスクの町を描いた「ヴィテブスクの上に」(一九一四年)の絵で、空に浮いている老人だと推定されました。また、シャガールについては、これより後に新美南吉も日記の中で、マルク・シャガールに傾倒したと述べているとの指摘がありました。(校定新美南吉全集第十一巻 150ページ 昭和十二年ノート1 1937年2月13日)

森三郎の作品「繪」の中の絵の構図左手は、黒い頭巾を被った女の人が、卵の入った手籠を腕にかけ、十二歳の半ズボンの男の子の手を引いて歩いている姿です。

絵の中の男の子は疲れているのか、泣きだしそうな顔で歩いています。「繪」の主人公貞治は、この女の人に手を引かれ、市場へ卵を売りに行く夢を見ます。どこまでも続く塀、前に行く老人、その老人は門の中へ入ったかと思うと煙のように消えてしまいます。「いやだ、こわいよう。」と声を出した時、お母さんに起こされました。西洋人の女の手に手を引かれ、怖い思いにかられ、「いやだ」と叫ぼうとする夢は、『赤い鳥』昭和8年2月号の「うんすんガルト」にも、よく似た描写があったことを思い出します。(「かささぎ通信」第26号参照)

「まほう塚」は、夏休みの最初の三日間に開かれる林間学校を題材にしています。町から二里ほどはなれた大浜という海岸が林間学校の場所です。軽便鉄道で行く者、自転車で行く者に分かれていきます。会員の水野さんの体験によれば、昭和10年の亀城小学校の場合、四・五・六年生が三日間、新川小学校を借りて、新須磨海岸で水泳訓練をしたそうです。

主人公の修吉は、海の中で足をけがし、さびしい気持ちで一人休んでいます。そんな時に出会った、やせて、青白い顔をしたお寺の人が、かつてこの地で転地療養して亡くなったおばさんその人ではないかと思えてきます。



水野さん作画 (思い出の地)

おかあさんに無理を言って、林間学校に持つていくために魔法瓶を買ってもらったことも、不安定な心の動きに関係していたのかもかもしれません。自分のわがままが親を困らせていたことを感じつつ、母親に甘えを言う、この年頃の少年の心理は「雪」「赤い鳥」昭和8年4月号)にもみられたところですよ。(「かささぎ通信」第28号参照)

次回予定 平成28年7月8日(金)午後1時~3時

『赤い鳥』昭和9年9月号初出作品「一年生」「さいかち虫」